2014年1月21日（東京神学大学全学祈祷会）説教原稿

　　　　　　「**いつまで、あなたは聞いてくださらないのか」**

聖書箇所：ハバクク書　1:2-3、3:18-19：讃美歌285番/540番

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

1. ハバクク書から二か所お読みいただきました。最初の箇所は、ハバククが、神様が祈りに答えて下さらないことを嘆く箇所です。むしろ、神様に抗議している、と言ってもよい言葉です。2節を、直訳的に訳しますと、「主よ、私はどこまで叫び求めるのでしょうか。私があなたに「暴虐！」と叫ぶのをあなたは聞かれません。また助けることをなさいません」となります。単に、神様の助けがない事を嘆いているのではありません。叫んでいるのです。「いつまで叫び求めなければならないのか。「これは暴虐だ」と叫んでも神様は聞いてくれない」と言っています。荒野をさまよいながら、叫びをあげているハバククを想像してださい。続いて3節では「なぜ、あなたは私に災いを見させ、不幸を見させるのですか」、と叫び、神様に問いを投げかけています。むしろ、抗議している、と言っても良いでしょう。さらにハバククは言葉をつなげ、「私の前に暴力と暴虐があり、論争と闘争が起こっている」といっています。ハバククは目を覆いたくなる「暴力と暴虐」を見させられ、これから逃れたいのに逃れられない状況に置かれているのです。
2. ハバククは何を見ていたのでしょうか。ハバククはエレミヤとほぼ同時期の預言者ですが、ユダ王国がバビロニアに滅ぼされる直前の、政治的には惨憺たる状況の中で預言いたしました。強大な勢力を誇ったアッシリアも紀元前7cには勢力も衰えをみせ、これに代わってバビロニアが勢力をのばしてきました。伝統的に、カナン地方に影響力を持っていたエジプトは、これと対峙しました。バビロニアの若き指導者ネブカドネザルはエジプトを打ち破り、ユダヤの王エホヤキムはその臣下とならざるを得ませんでした。その後若干の曲折がありましたが、紀元前597年、ついに、ユダ王国はバビロニアに滅ぼされることになりました。バビロン捕囚です。ハバククが預言したのはユダ王国がバビロニアの従属国にされた前後とみられ、まだかろうじてユダ王国が存続していたころです。ユダ王国内はエジプトにつくのか、バビロニアにつくのか、自力で独立を確保しようとするのか、喧々諤々の状況であったと想像されます。折に触れて、バビロニアからの侵入があった、と思われます。その時は略奪、暴力、殺人が繰り返されたでしょう。ハバククは指導的立場に居た人物と想像されますが、そのような「暴虐」を見ても何もできずにいたのです。ユダ王国の命運は風前のともしび、であり、絶望的状況でした。その状況の中で悲痛な叫びをあげたのです。
3. ハバククが「暴虐！」と叫んでいる時代は紀元前7cの終わりくらいから、6cの初期にかけてのことです。今から2,600年以上前の時代です。現代は全くこれとは異なる社会であり、今や「暴虐！」と叫ぶことはない世界でしょうか。ご存じのとおり、シリアの難民の悲惨な状況、南スーダンでの内戦状況、更には各地で頻発する民族紛争、人権弾圧による投獄、拷問等、未だ「暴虐」は至る所にあります。しかし、「日本はそんなことはない。そんな野蛮な暴力から解放された社会になった」という声があるかもしれません。本当にそうでしょうか。実は、種類の異なる「暴虐」が遠慮せず、「正義」の名において、はびこっているのです。卒業され、伝道の一線に立つ方が直面する社会は、この「暴虐」のまかり通っている社会です。ないしは、伝道者が相対する人々はこの「暴虐」の現実の中に身を置かざるを得ない人々なのです。この「暴虐」が正義の名において起きるのはこの社会の根本にあるのが「競争原理」だからです。競争原理は必ず勝者と敗者を生みます。しかし、それが、命に関わることでなければ、問題は小さい、と言えます。しかし、経済活動における「競争」においては、敗者は生存の危機にすぐ直面します。能力の差ではありません。努力の差でもありません。勝者、敗者を決定する最大の要因は偶然です。更に問題を大きくしているのは、「競争原理」の下では止まることが許されないことです。本来の意味で、価値あることであろうがなかろうが、競争に勝つために常に新しいことをしていかなければならないのです。そのようなトラウマが支配しているのです。この中で、うつ病を始め、精神病がサラリーマンの間に広がっていることは周知のことです。なにか「暴虐」の力が働いています。ハバククの叫びは現代日本の状況においても叫ばれる言葉です。企業の上層部に行けば、この「暴虐」から逃れることができるのでしょうか。実はそうではないのです。「自分の会社の社員の生活を守るため、より豊かにさせてやるため」には他の企業に打ち勝たねばなりません。時と場合によっては、「安全性」とか「危機管理」は手を抜く必要があります。また、競争上、費用削減のために、意図した首切りもやらざるを得ない時があります。従業員にとっての「暴虐」を「企業競争力強化」の名目で実行する、ことになるのです。時により、自責の念に堪えられなくなります。先般のJR北海道の元社長の自殺はその結果でしょう。企業経営に従事している者も「本来どうすべきか」ということは知っていても、企業競走上、「やれ」と言わない、のです。「周りに知られなければ、やらなくてもよい」と言ったかもしれません。企業経営陣もこの「暴虐」の下にあるのです。更に一言申し添えれば、この「暴虐」の実行犯である自分が、それに慣れ、罪悪感を持たなくなる、という恐ろしさです。信徒は、このような「暴虐」の現実の只中に置かれている、ということです。ハバクク書に戻ります。
4. いくら、悲劇的状況に置かれたとしても、「私はいつまでまたねばならないのですか。「暴虐」が蔓延していると、言っているのに、聞いている風もありませんし、ましてや助けるなんてつもりもないのですか」とハバククは言っています。後の文書ではありますが、ヨブ記におけるヨブの神様への抗議に似ています。もしかしたら、ハバクク書は、ヨブ記のさきがけなのかもしれません。さらに続きます。ハバクク書は1章5節か11節までが、ハバククの問いに対する「主の答え」です。主はバビロニアを手段としてイスラエルを裁くが、バビロニアもその高慢により、いずれ罪に定められる、というのです。しかしハバククは納得致しません。12節より再度「預言者の嘆き」が始まります。13節をご覧ください。お読みします。「あなたの目は悪を見るにあまりに清い。/人の労苦に目を留めながら/捨てておかれることはない。/それなのになぜ、欺く者に目を留めながら/黙っておられるのですか/神に逆らう者が、自分より正しい者を呑み込んでいるのに」とあります。神様に信頼したいのに信頼できない屈折した心情が吐露されます。「欺く者に目を留めながら/黙っておられるのですか」と再度問うハバククがいます。単なる問いではなく、「どうしてなのですか」と問い詰めるが如き言葉です。第一の嘆きにおける響きがここにも伝わっています。「「これは暴虐だ」と叫んでも神様は聞いてくれない」というあの言葉です。続いて、15節で“神様に逆らう者が、他の人間より奪い、豊かになり、喜び踊っている”と言っています。伝道の使命にある私たちが直面する社会は、ハバククが言うような単純な収奪社会ではありません。しかし、「神様なしの人間がむしろ幸せである」という意味で通ずる、ところがあります。神様と無関係に過ごせることが最上である、と考える社会です。「信仰者はなにか不幸な出来事から神頼みになった人で、そのような場に出会うことのないようにすることこそ良い社会だ」と考える社会です。そのような神様に対し「不条理」を訴えるのに疲れ、逆に、神様から意識的に距離を置くようにしている社会ということもできるかもしれません。本当は、神様を無視できないことを知りながら、無視しようと努めている社会です。このなかで、主の福音を証する使命を託されているのです。この社会の福音に対する態度は「無視」です。意図的な「無視」です。世の中には「真剣に物事を考えないようにする」制度や装置が氾濫しています。これらをうまく使うことによって、「真剣になる」ことがないようにしているのです。真剣になることは「ダサイ」のです。先ほどもうしあげた「暴虐」を含め、これら「暴虐」は目に見えますが、この「無視」ということは見えません。ある意味ではハバククが直面した以上の「暴虐」のはびこる社会、といえないこともありません。無意識に、救いを求めていながらも、「宗教は危険なものである」という理由から、神様から逃走しているのです。伝道者の言葉は、無視されてしまっているのではないか、と感ずる時がしばしばあります。この意味では、ハバククが「主は、私が「暴虐」と叫ぶのを聞いて下さらない」と抗議するのは、私たちの声でもあります。「神様、とにもかくにも、何とかしてください」と祈っているのです。
5. ハバククの神様への言葉は、神様に対しての言葉としては大変不遜な言葉と見えます。先にあげたような、「非難めいた問い」や「抗議の言葉」や「うらみつらみ」のような言葉は、神様への祈りに含めてよいのでしょうか。ハバククはこのような神様の怒りを引き起こしかねないことも祈りで言っています。ヨブ記も同様です。詩篇ではこれにもまして、敵への呪いや、復讐のお願いや、とにかく何でも祈ります。何でもです。包み隠している方がずっと罪なようです。善きにつけ悪しきにつけ、すべてをさらけ出して祈る方が真実と見られ、神様は「良し」とされるようです。何でもです。個人的なことも、家族のことも、教会でのことも、国の政治のことも、世界で起こっている紛争についても、です。福音のメッセージが全く聞かれていないと見えることについても、です。自分のふがいなさについても、「どうしてこんな人間を作られたのか」についても、です。人には言えない恥ずかしいことについても、です。どうしても許せない、と思う人についても、です。神様に文句を言いたいときは大声で文句を言いましょう。ありのまま、すべてを、祈りましょう。私たちは、何もかも主に申し述べることにしましょう。
6. ハバクク書では、この「預言者の嘆き」のあと、2章に入り第二の「主の答え」が続きます。この答えは、終わりの時の主の裁き、についてです。5節からは、暴虐の限りを尽くした者どもへの主による報復について記されています。黙示のような表現が続きます。この主の答えは2章の最後の「全地よ、御前に沈黙せよ」との言葉で締めくくられます。「神を神とせよ」との命令です。最後の3章は神様への「賛美の歌」とされています。自然の中で示されるおそるべき神の力が示され、神様は、ご自分の民を救い、敵を裁くのです。その裁きの場は、すべての生き物が絶たれ、自然は荒涼たる地となります。「賛美の歌」とは言っても、ある種「すさまじさ」があり、緊張感のある賛美です。恐れおののきつつ神様の力を讃える、という言葉であり、常識的には「賛美」という印象は受けないものです。それらの最後に、本日の二番目の言葉がでてきます。直訳をいたしますと、「私は、主にあって喜び、救いの神において喜び叫ぶ。主は、私の主、私の力、雌鹿（めじか）のように、彼の足を置き、高いところを歩ませる」、となります。先ほどの嘆きの言葉と、このところではあまりにも大きなgapがあります。最初の「預言者の嘆き」のところでは、「暴虐」に抗議し叫んでいたのですが、ここでは喜び叫ぶのです。唐突です。この二つの言葉の間にある「主の答え」は、最後の箇所にある、この讃美が自然に湧いてくるような内容ではありません。ヨブ記においても、神様への抗議が、神様の全能の示しによってヨブの讃美に転換するのですが、そこには神様が常にヨブの置かれている状況を見守っているのだ、という神様のヨブへの愛が示されていました。しかし、ハバクク書の場合、それも見られません。神様の全能の権能だけです。では嘆きの歌の場合、最後の讃美はいつもこのように唐突なのでしょうか。ハバクク書の最初の預言者の嘆きの所を見ますと、「主は、---助けることをなさいません」という言葉が出てきます。この言葉を聞くと思い起こす言葉があると思います。そうです、十字架上の主イエスの最後の言葉です。詩篇22編2節です。その部分をお読みします。「なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜ私を遠く離れ、救おうとせず/呻（うめ）きも言葉も聞いてくださらないのか」、と述べられています。この詩編22編は嘆きの詩編の一つですが、その賛美はどのようになっているでしょうか。この節のあと祈りがあり、23節において、賛美が始まります。「わたしたちは---集会の中であなたを賛美します。主を畏れる人々よ、主を賛美せよ」と記されています。直前の祈りの言葉から、突然、賛美が始まります。神様への讃美の声を上げるのは聖霊の働きがそこにあるはずですから、賛美の直前の祈りの中で、聖霊の働きを受けたということです。ハバククの嘆きから喜びの讃美までを見ますと、私たちが苦難にあるとき、祈りと願いを捧げていると、ある時、人間にとっては突然、聖霊が働き、私たちが賛美の声をあげることができるようになる、と理解せざるを得ません。詩篇22編も同様です。私たちは神様の知恵をも知らず、すぐに答えを頂くことばかり求めがちですので、このことは、忍耐の重要さも含め、きもに、命じておいた方が、よいということでしょう。正直なところ、「神様あまりといえばあまりです」としか言いようのない時もあります。それでも祈りましょう。がむしゃらに祈ってみましょう。「言葉の無い祈り」でも良いです。「絶句」という時もあります。どうも、私たちの都合の良い時に、都合の良い方法で私たちの祈りに答えてくださり、それによって我々が賛美の喜びを表す、というのではないようです。時も、方法も神様の自由な選択の中に在ります。私たちの予想もしなかった時に、予想もしなかった方法で祈りに答えてくださるのです。私たちは事後的にしかその摂理はわかりません。でも必ず答えてくださるのです。それは主イエスが私たちを選ばれたからです。
7. ハバクク書の最後のところの18節は新共同訳では「わたしは主によって喜び/わが救いの神のゆえに踊る」となっており、喜び、踊る、と、描かれています。単なる喜びではなく、喜び踊るのです。こう読んでみますと、新約聖書の一節が思い起こされます。山上の説教の一節です。新改訳聖書マタイ5章12節は「喜びなさい。喜びおどりなさい。天においてあなた方の報いは大きいのだから」となっています。これは、前の節でイエス様のために、「ののしられたり、迫害されたり、またありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなた方は幸いです」と言われているのを受けた言葉です。この言葉は更にフィリピ人への手紙に繋がり、迫害の中で「喜びなさい」というパウロの勧めへと繋がって行きます。人間の常識では喜べない時に「喜びなさい」と命じているのです。喜び、喜び踊ることが神様の恵みを多く感ずることができるようにしてくれるからです。ハバククの場合も同様です。ハバククは瀕死のユダ王国を前にして「喜び踊る」ことなど到底できない中で、あえて、喜び踊ったのです。涙の中で喜び踊ったのです。そして神様から救いの希望の確信を頂いたのです。それこそが旧約時代における神の恵みです。私たちキリスト者には「再び来たり給う主」の希望が与えられています。「マラナ・タ」の言葉と共に喜び踊りましょう。声を出して祈り、喜び踊りましょう。あえて喜ぶのでよいのです。そうすれば、人間には予想できない神様の恵みが与えられるはずです。
8. 祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日の祈りの時を感謝致します。本日は本学を卒業し、伝道の前線に立つ人々のための特別な祈りの会です。ハバクク書の中から学びました。ハバククのように、なにもかも主に祈る私たちとしてください。不満も、抗議も受けてくださる神様であることを知らされ感謝致します。真実を吐露することこそ主が望まれていることと信じます。どのような形で、いつ、祈りが答えられるかは人の理解を越えた所にありますが、それを待つ忍耐をお与えください。また、ハバククが、喜び踊ったように、パウロが強く勧めているように、喜び踊る者とさせてください。主イエス・キリストの名によって祈ります。アーメン）